# 『今昔物語集』における言語活動語彙の文体的特徴


| メタデータ | 言語: Japanese<br>出版者: 明治大学国際日本学部<br>公開日: 2024-05-30<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 田中,牧郎<br>メールアドレス:<br>所属: |
| --- | --- |
| URL | http://hdl.handle.net/10291/0002000401 |

【献呈論文】

# 『今昔物語集』における言語活動語彙の文体的特徴

Stylistic Characteristics of Language Activity Vocabulary in *Konjaku-Monogatari-Shū*

田　中　牧　郎
TANAKA, Makiro

## Ⅰ　はじめに

平安時代中後期（10 ～ 11 世紀）の日本語は、貴族の話し言葉に基づく和文の文章と、漢籍や仏典を訓読するなかで形成された漢文訓読文の文章とが並立し、それぞれで用いられる語彙は異なる様相を示していた。ところが、平安末期（12 世紀）から和漢混淆文が確立していくなかで、和文の語彙と漢文訓読文の語彙が同じ文章の中で用いられるようになり、類似の意味をもつ語彙の間に文体差を伴う新たな語彙体系が形成されていった。

平安末期の和漢の混淆にともなう新たな語彙体系を把握しようとする際、一つの作品の中に文体の異なる部や巻が共存している『今昔物語集』（以下『今昔』）は、きわめて好適な資料である。天竺震旦部（巻 1 ～ 10）は漢文訓読文、本朝世俗部（巻 22 ～ 31）は和文で書かれ、本朝仏法部（巻 11 ～ 20）はその中間であるという顕著な傾向があることに加えて、巻や説話にまで分け入って見ていくことで、鮮明な文体差が見えることがあるからである。

『今昔』の言語の研究史をまとめた佐藤（1984）によると、信頼できる本文である「日本古典文学大系」（岩波書店、以下「旧大系」）に『今昔』全 5 冊が収められた 1960 年代に、研究が質量ともに飛躍したという。その後、『今昔物語集文節索引』『同自立語索引』『同漢字索引』（笠間書院）が整備された 1970 ～ 80 年代に、言語表現の細部までを分析する研究が充実した。そして、国立国語研究所編『日本語歴史コーパス』の中に『今昔』が組みこまれた 2010 年代後半からは（田中 2014）、コーパスを用いることでより精緻で見通しのよい研究が可能になっており、『今昔』の言語研究は新たな研究段階に至ったと言えよう。

本稿の筆者も、1980 年代から『今昔』の語彙を文体差の視点で考察する研究を重ねてきたが（田中 1989、2003 など）、『日本語歴史コーパス』の開発に携わるようになったことを機に、語彙の文体差をマクロ・ミクロの双方の視点で総合的に記述することを目指した研究を行うようになった（田中 2015、2016 など）。この流れの中で、田中（2022）では、『今昔』における人間や家族を表す名詞の 5 つの類義語群を取り上げて、和文的特徴と漢文訓読的特徴を持つ語を特定し、文体的特徴が明瞭な類義語間には意味差を伴う傾向があることを明らかにした。その研究の結果を

受けて指摘した課題の一つに、より広範囲の語彙の文体差について研究する必要性がある。

そこで、本稿でも、『今昔』における語彙の文体的特徴を扱っていくが、特に、田中（2022）ではあまり扱えなかった多義語を含む類義語群に焦点をあてる。一語が多くの語義を持つことの多い動詞にも類義語が広がっている語群を取り上げて、同様の調査と考察を行って、『今昔』における語彙の文体的特徴について、そのありようの解明を進めることを目的とする。具体的には、名詞と動詞に類義語が広がり、高頻度語の多い語群として、国立国語研究所編『分類語彙表増補改訂版』（以下『分類語彙表』）における「1.31 言語」「2.31 言語」の中項目に注目し、その中のいくつかの分類項目における高頻度の名詞と動詞を対象にする。

## Ⅱ．調査の手順

本稿で実施する『分類語彙表』の中項目「1.31 言語」「2.31 言語」に属する高頻度語を対象とした調査は、田中（2022）で「1.20 人間」「1.21 家族」に属する高頻度語を調査したときと同じ考え方で実施するが、取り上げる分類項目の選び方や、語彙頻度の集計の仕方などが異なっているところも多いので、以下に手順を説明する。

［1］『日本語歴史コーパス』のデータをもとに国立国語研究所から公開されている、「『日本語歴史コーパス』統合語彙表（バージョン 2022.03）」（以下「統合語彙表」）をもとに、『今昔』の本朝仏法部（巻 11 ～ 20）、本朝世俗部（巻 22 ～ 31）の全語彙の巻別語彙頻度表を作成する（『今昔』の天竺震旦部（巻 1 ～ 10）は、『日本語歴史コーパス』に収められていない）。具体的には、Excel のピボットテーブルの機能で、「作品名」が『今昔』であるものをフィルターで抽出し、「語彙素 ID」「語彙素」と「部」とでクロス集計を行うことで実現する。なお、この「統合語彙表」の「部」には、『今昔』の場合は、巻番号が収められている。

［2］上記の巻別語彙頻度表の巻番号をもとに、巻 11 ～ 20 の本朝仏法部、巻 22 ～ 31 の本朝世俗部の二つの部に分け、部別語彙頻度表に集約する。

［3］国立国語研究所編「分類語彙表番号 -UniDic 語彙素番号対応表」（近藤・田中 2020 参照）を用いて、上記の部別語彙頻度表の「語彙素 ID」に対して「分類語彙表番号」を対応付ける。『分類語彙表』に収録されていない語で、ある程度の頻度のある語については、筆者の判断で番号を付ける。

［4］［3］までの作業で得られた部別語彙頻度表で、「分類語彙表番号」により「1.31 言語」「2.31 言語」に属する語について、国文学研究資料館編『日本古典文学大系本文データベース』（底本は「旧大系」）に収録されている『今昔』巻 1 ～ 10 の天竺震旦部の本文テキストに対して文字列検索を行って用例を収集する。その結果得られた各語の天竺震旦部の粗頻度を、部別語彙頻度表に書き加える。

［5］『分類語彙表』において、名詞の「1.31 言語」は 30 の分類項目、同じく動詞の「2.31 言語」は 23 の分類項目から構成されるが、「2.31 言語」の 23 の分類項目はすべて、「1.31 言語」のピリオド以下の 4 桁の数字が同じ分類項目に対応しているので（例えば「1.3102 名」「2.3102 名」

など)、名詞と動詞を１つの類義語群と扱う（例えば「3102 名」の１つにまとめる)。

［6］上記の作業は、『日本語歴史コーパス』の読み（おおむね底本である「新編日本古典文学全集」(小学館、以下「新全集」）の読みに従って付けられている）によって行うが、中には読みの可能性が複数あり、読み分けの作業を行わずに頻度を集計するわけにはいかないものがある。そうした場合は、文脈から読み分け作業を行って集計するか、読み分けできない複数の語を１つに統合して集計する。

［7］天竺震旦部、本朝仏法部、本朝世俗部の３つの部の頻度を相互に比較できるようにする調整頻度を、次のように算出する。各語の各部における粗頻度を「新日本古典文学大系」(岩波書店、以下「新大系」）の部別の行数（天竺震旦部：11,440 行、本朝仏法部：11,830 行、本朝世俗部：9,800 行）で割った数値に 1000 を掛け、1000 行あたりに何回出現しているかの数値を算出する。新大系を用いるのは、『今昔』全体が収録され、紙面の行数・文字数が均質化されているからである。

以上の７段階の手順で語彙を抽出集計した結果、以下の５つの分類項目において、多くの高頻度語が得られた。なお、以下、語を示す場合は、統合語彙表の「語彙素」を古語の表記法に変換して示す。

3100 言語活動：「言ふ」「申す」「宣ふ」「読む」など
3102 名：「名（な)」「字（あざな)」「呼ぶ」「唱ふ」など
3123 伝達・報知：「伝ふ」「告ぐ」「教ふ」「遺言」など
3132 問答：「聞く」「問ふ」「尋ぬ」「返り事」など
3151 書き：「書く」「しるす」「写す」「書写」など

これらの分類項目の語彙について、頻度や、用例における語義や用法を観察し、語の文体的特徴を分析しているが、本稿では、一定の整理のついた、「3102 名」「3123 伝達･報知」「3151 書き」の３つの分類項目に属する語彙について、分析の結果を報告し考察を行う。

## Ⅲ．語彙の分析

### 1.「3102 名」の語彙

#### 1.1　分析対象の語彙

はじめに、「3102 名」の分類項目に属する語彙を見よう。『今昔』全体で 20 件以上ある語には、名詞「名（な)」「字（あざな)」「姓（しょう)」、動詞「呼ぶ」「呼ばふ」「唱ふ」「名付ける」の７語があがるが、「姓」と類義性の高い「姓名」(12 件）も対象に加え、８語を観察する。これら８語について、『今昔』における部別の粗頻度と調整頻度を集計するが、「呼ぶ」と「呼ばふ」とは読み分け困難な例も多いため、統合して集計した。その結果を示すと、表１の通りである。表の数値の左側が粗頻度、右側が調整頻度である。

**表１　「3102 名」の高頻度語（左：粗頻度、右：調整頻度）**

| | 名 | | 字 | | 姓 | | 姓名 | | 呼ぶ・呼ばふ | | 唱ふ | | 名付く | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 天竺震旦部 | 163 | 14.25 | 4 | 0.35 | 13 | 1.14 | 10 | 0.87 | 73 | 6.38 | 32 | 2.80 | 18 | 1.57 |
| 本朝仏法部 | 128 | 10.82 | 7 | 0.59 | 17 | 1.44 | 1 | 0.08 | 135 | 11.41 | 178 | 15.05 | 25 | 2.11 |
| 本朝世俗部 | 65 | 6.63 | 14 | 1.43 | 2 | 0.20 | 1 | 0.10 | 151 | 15.41 | 4 | 0.41 | 5 | 0.51 |
| 計 | 356 | 10.77 | 25 | 0.76 | 32 | 0.97 | 12 | 0.36 | 359 | 10.86 | 214 | 6.47 | 48 | 1.45 |

## 1.2　「名（な）」

表１のうち、まず名詞語彙から見ていこう。「名（な）」がもっともよく使われ、全体に高頻度で各部に広がっているが、天竺震旦部、本朝仏法部、本朝世俗部の順に頻度が高く、部による偏りも見えている。この偏りは、文体の違いを反映しているのだろうか。

「名」の用例を見わたすと、(1) のように、「名を（ば）○○と（ぞ）云ふ［申す・付く］」という形式で、人物や仏の名前を提示する用法が非常に多く、国や寺の名前を提示する場合もある。なお、『今昔』の用例の引用は、天竺震旦部は「旧大系」の本文、本朝部は『日本語歴史コーパス』の「原文表記」によるが、読みやすさを考慮して、筆者の判断で表記に手を入れる場合がある。

(1) 今昔、天竺ニ一人ノ人有リ、名ヲバ和羅多ト云フ。(巻 1-25)

これは、名をことさらに提示するような表現形式と言えるが、部による頻度差のある背景には、まず次のようなことがありそうである。天竺震旦部や本朝仏法部には、仏や高僧、歴史上の人物など、名のある登場人物が多いのに対して、本朝世俗部には、名も無き登場人物が多くなるということである。本朝世俗部でもこの表現形式が比較的多く見られるのは、巻 24 と巻 25 であるのは、これらの巻が名のある貴族や武士の説話を集めていることと関係していよう。このように、「名」の頻度の高低は、名を重視する説話や話題が多いか少ないかによるところが大きい。

ほかに、部による頻度差が目立つ用法に、(2) のような、仏の名前について「○○の名を唱ふ［聞く］」という形式で、仏名を口にしたり耳にしたりするものが挙げられる。

(2) 只一度観音御名ヲ唱フルソラ、諸ノ願ヲ満給ナリ。(巻 16-4)

仏が主に登場する説話は、天竺震旦部と本朝仏法部に多いことから、この用法の存在も「名」に頻度差が生じている原因になっていよう。

これら２つの用法の存在から、「名」という語の部による頻度の違いの原因については、文体差ではなく話題差に求めるべきである。一方、文体差が原因で部による頻度差が生じていると考えられるところもある。それは、「名」の転義用法の出現が本朝世俗部に偏っているところである。『日本国語大辞典 第２版』（小学館、以下『日国』）は、「名」について、中古までの用例を挙げる語義を３つ示しているが、そのうち『今昔』に例が確認できるものは、［１］「個、または集合としての事柄や物を、他から区別するために、対応する言語でいい表わしたもの。なまえ。」と、［２］［１］に伴う事柄、または、その属性を象徴するものとしての名称。」の２つである。［１］は名前、［２］は評判、と言い換えることができよう。［１］が本義で、上に挙例した（１）（２）のようなものである。［２］は転義で、次の（３）のようなものである。

（３）其ヨリ後ナム此ノ維茂ハ東八ケ国ニ名ヲ挙テ、弥ヨ並ビ無キ兵ニ被云ケル。(巻 25-5)

［２］の転義は、『分類語彙表』では「1.3142 評判」に当たるもので、その類義語群にある『今昔』にも見られる語には、（４）に示す「名聞」「聞こえ」がある。

（４）現世ノ名聞利養ヲ永ク棄テ、偏ニ後世菩提ノ事ヲノミ思ケル間ニ、カク止事無キ学生ナル聞エ高ク成テ（巻 12- ３）

「名聞」は７件すべてが本朝仏法部にあり、漢文訓読的な特徴が指摘できる。「聞こえ」は 18 件あり、天竺震旦部１件、本朝仏法部 10 件、本朝世俗部６件とあり、文体による特徴は見えにくい。評判の意味の「名」が本朝世俗部に偏っているのは、話題によるものではなく、文体差によるものだと考えることができよう。「聞こえ」を中立的な語として、「名」と「名聞」とが、和文的特徴か漢文訓読的特徴かで文体的に対立しているわけである。

「名」は、本義用法では、文体に関係なくよく用いられるのに対して、転義用法では和文的特徴を有しているのである。

### 1.3 「字（あざな）」

表１の名詞語彙のうち、「字（あざな）」の部別頻度を見ると、「名」とはちょうど反対の分布をしている。本朝世俗部に最も多く、本朝仏法部がこれに次ぎ、天竺震旦部で最も少なくなっているのである。用例を見わたすと、（５）（６）のように、どの部でも同じ意味・用法で使われていることがわかる。

（５）今昔、平ノ定文ト云フ人有ケリ。字ヲバ平中ト云ケリ。（巻 30-2）

（６）今ハ昔、震旦ノ唐ノ代ニ、幽洲ノ漢懸ト云フ所ニ、虞ノ安良ト云フ人有ケリ、字ヲ族ト云フ。（巻 6-11）

正式名ではなく別名である「字」を話題にすることが、天竺震旦部では少なく、本朝仏法部では少し増えるがまだ少なく、本朝世俗部で多くなるという、話題の多寡が頻度の偏りを生んでいるのだと考えられる。

なお、「字」の類義語に「異名」があり、『日国』の「字」の「語誌」欄に、院政期の「異名」と「字」には使い分けがあり、「異名」は、身体・性行などの特異な点に基づく命名でマイナス評価を伴い、「字」は、命名の由縁に限定はなくマイナス方向への価値評価はない、という趣旨の記述がある。『今昔』では「異名」は４件使われており、すべて（７）のように巻 28 にあり、『日国』の指摘通りの意味や価値評価を読み取ることができ、和文的特徴を伴っている。

（７）僧共弥ヨ咲テ、其ヨリ後、小寺ノ小僧ト云フ異名ハ付タル也ケリ。「無端ク物咎メシテ、異名付タル」トテナム、基僧悔シガリケル。（巻 28-8）

意味や文体に限定のある「異名」に対して、「字」はそうした限定はなく、広く用いられた語と見るべきものである。また、この語には「名」のような転義もない。

### 1.4 「姓」「姓名」

表１の名詞語彙には「姓（しょう）」「姓名（しょうみょう）」という漢語が２語あり、いずれも天竺震旦部に多く（「姓」は本朝仏法部にも多い）、本朝世俗部に少ない。低頻度の本朝世俗部の例を見ることで、その文体的特徴を考えていこう。

まず、「姓」は本朝世俗部に2件あり、（8）のような「姓」単独例と、（9）のような「本姓」という漢字列の例である。

（8）大織冠ヲ以テ即チ内大臣ニ被成ヌ。大中臣ノ姓ヲ改テ藤原トス。（巻22-1）

（9）忠仁公、「湛慶法師既ニ濫行ニ成タリ。僧ノ身ニテ異様也。亦内外道ニ付テ極タル者也。此レヲ徒ニ可被棄キニ非ズ。速ニ還俗シテ、公ニ可仕キ也」ト被定テ、還俗シツ。名ヲ公輔ト云フ。本姓高向也。（巻31-3）

（8）は、中臣鎌足が藤原に姓を改めることを言うもので、まさに「姓」が主題になる話での特別の意味合いを帯びた箇所である。（9）の「本姓」は、コーパスの底本の「新全集」では「もとのしやう」と読んでいるが、二字の熟合した「ほんしやう」という字音語であった可能性がある。「本姓」という漢字語は、平安時代の古記録によく使われており、漢文との親近性が強い語だと思われる。これらのことから本朝世俗部の「姓」は、漢文訓読的特徴を持った語が特別な意味を表すために顔を出したものだと見ることができよう。

これに対して、天竺震旦部と本朝仏法部では、(10)のように特別な意味を持たない箇所でも「姓」は普通によく使われている。漢文訓読的特徴を持つ「姓」がこれら2つの部で多用されることは矛盾しない。

(10) 今昔、一人ノ女有ケリ。姓ハ藤原ノ氏也。（巻15-50）

次に、「姓名」も、やはり本朝世俗部には少なく、(11) が唯一の使用例である。

(11) 林ノ中ニ辛ビタル音ノ気色異ナルヲ以テ、此ノ灯為ル者ノ姓名ヲ呼ケレバ、「怪」ト思テ馬ヲ押返シテ、其ノ呼ブ音ヲ弓手様ニ成シテ（巻27-34）

この例は、「被呼姓名射顕野猪語」という題の、姓名を呼ばれることをテーマとする説話の中で使われていることから、姓名を呼ぶことが特別な意味を持つ場面における例と言えよう。この語は、古記録などにはよく使われており、やはり漢文訓読的特徴を有していたと見られる。

このように、「姓」「姓名」は漢文訓読的特徴を持つ語であることが明らかだが、これらと同じような意味を表す、和文でも用いられる語は見つからない。「名字（苗字）」「氏名」などの語は『今昔』にはなく、「かばね」「氏（うじ）」なども、姓の意味では使われていない。

### 1.5「呼ぶ」「呼ばふ」

表1における動詞語彙を見ていこう。まず「呼ぶ」と「呼ばふ」であるが、『日本古典対照分類語彙表』（宮島ほか2014）では、「呼ぶ」は「2.3031 声」「2.3100 言語活動」「2.3102 名」「2.3520 応接・送迎」、「呼ばふ」は「2.3100 言語活動」「2.3350 冠婚」に分類されており、「2.3100 言語活動」が共通する。『分類語彙表』で「2.3100 言語活動」に掲げられる「呼ぶ」に、［大声で］と注記されいることを参考にすれば（古語「呼ばふ」は非掲載）、呼び方が大きな声であるか否かで「呼ばふ」と「呼ぶ」は読み分けることができそうにも思われるが、文脈から大きな声かどうかを判別して全例の読みを決めるのは困難である。現に（12）は、コーパスの底本である「新全集」では「よぶ」とし、コーパスでもそう認定しているが、「旧大系」では「ふ」を清音に読み「よばふ」としており、解釈が分かれている。そこで、表1では、「呼ぶ」「呼ばふ」を合算した頻度を示した。

（12）馬ヨリ下テ鞍ヲ下テ、馬ニ逆様ニ置テ逆様ニ乗テ、呼ブ者ニハ女手ト思ハセテ、（巻 27-34）

「呼ぶ」であることが確実な用法のうち、多くは、（13）（14）のように、誰かの名を口にする意味で、漢文訓読文（13）でも和文（14）でも、同じように使われている。こうした「呼ぶ」の用法を「呼ぶ（基本義）」とする。

（13）王、憂陀夷ヲ呼ビテ問給フ、「太子出テ楽有ツヤ否ヤ」ト。（巻 1-3）

（14）医師和気重秀ヲ呼テ、「此ク太ルヲバ、何ガセムト為ル。･･･」ト宣ケレバ（巻 28-30）

確実に「呼ばふ」と読めるものについても、（15）（16）のように、どちらの文体でも使用されている。これらの「呼ばふ」の用法を「呼ばふ（基本義）」とする。

（15）音ヲ通ス程ナラバコソハ呼バヽメ、目モ不及ズ、音モ不通ヌ程ナレバ、力モ不及デ居タリ。（巻 10-35）

（16）其時ニ聖人、「此ハ何ニシ給ヒツル事ゾ」ト云テ、呼バヒ泣キ迷フ事無限シ。（巻 20-13）

しかし「呼ぶ」「呼ばふ」を合わせた全体としての部別の出現頻度を見ると、天竺震旦部でやや少なく、本朝仏法部で多く、本朝世俗部でさらに多くなっている。用例を見わたしていくと、こうした頻度差が生じる事情として、部による出現頻度に大きな差がある用法の存在が浮かび上がってくる。

まず、「夜這」「這」という表記が当てられることもある、求婚を意味する「呼ばふ」の語義（「呼ばふ（転義）」とする）は、本朝仏法部の巻 20 に 1 件あるほかは、すべて本朝世俗部で使われている。

（17）此ノ娘ヲバ近江守無限ク傅テ、御子上達部ノ夜這ケルヲモ聞キ入ズシテ、「女御ニ奉ラム」ト思ケレドモ、（巻 30-3）

次に、発話内容を格助詞「と」で引用して示す（18）のような「呼ぶ」の語義（「呼ぶ（転義１）」とする）は、天竺震旦部には皆無で、本朝仏法部でもわずかな例しかないのに対し、本朝世俗部に十数件見出すことができる。

（18）関ノ者共並ビ立テ、「何主ノ人入レ。彼主ノ人入レ」ト呼テ、主従者次第ニ入ルニ、（巻 26-14）

そして、「呼び寄す」（19）、「呼び取る」（20）のような複合動詞の形で、誰かに声をかけて近付ける用法（「呼ぶ（転義２）」とする）は、天竺震旦部には少なく、本朝仏法部で少し増え、本朝世俗部で多くなることがわかる。

（19）明清弟子静真ト云フ僧ヲ呼ビ寄セテ、告テ云ク、（巻 15-10）

（20）継母此郎等ヲ呼取テ云ク、（巻 26-5）

このように、「呼ばふ（転義）」「呼ぶ（転義１）」「呼ぶ（転義２）」の３つの語義が、本朝世俗部に偏って出現していることから、「呼ぶ」「呼ばふ」には和文的特徴の顕著な語義が確かに存在していると見ることができよう。語義の拡張が、和文に限って進んでいるわけだが、和文で転義が起きているのは、「名」にも見られた現象であった。

### 1.6 「唱ふ」

表１で「唱ふ」を見ると、本朝世俗部にほとんど用いられず、天竺震旦部に多少あり、本朝仏法部にきわめて多いという、明らかな偏りが確認できる。表現を比較検討できる天竺震旦部と本朝仏法部の用例に注目すると、天竺震旦部では、(21)（22）のように、伎楽、音楽、仏の御名を対象とする用例が大部分であるのに対して、本朝仏法部では、(23）のように、念仏を対象とする用例が大部分になっており、二つの部の間で用法に大きな違いがあることがわかる。

（21）天竺ノ舎衛城ノ中ニ諸ノ人有テ自ノ身ヲ荘厳シテ伎楽ヲ唱テ城ヲ出テ遊戯ス。（巻 1-35）

（22）我等異口同音ニ仏ノ御名ヲ唱ヘテ此ノ苦ヲ済ヒ給ヘト申サム（巻 1-38）

（23）諸人彼ノ西門ニシテ弥陀ノ念仏ヲ唱ふ。（巻 11-21）

本朝仏法部の頻度がきわめて高くなっているのは、念仏を唱える場面が頻出する説話が非常に多いからであることも判明する。

なお「唱ふ」の本来の意味は、「声を立てて読む」「高く呼ぶ」（『日国』）といったものだったと考えられることから、先の（21）（22）のような場面が、本朝仏法部の後半や本朝世俗部で描かれる場合は、次の（24）（25）のように別の語で表現されたのではないかと考えることもできる。

（24）諸ノ止事無キ多ノ僧ヲ請ジ、微妙キ音楽ヲ奏シ、歌舞ヲ調ヘテ（巻 31-1）

（25）我レ其ノ仏ノ名ヲ呼ビ奉ラムニ、答ヘ給ヒナムヤ（巻 19-14）

「唱ふ」とほぼ同じ意味の語が「奏す」や「呼ぶ」だというわけではないが、「唱ふ」が本朝世俗部でほとんど用いられなくなるのは、話題差だけでは説明できないところがあることも確かである。こうした点からは、「唱ふ」に漢文訓読的な特徴を認めるべきではないかと考えられてくるのである。

### 1.7 「名付く」

「名付く」は、表１によれば、天竺震旦部と本朝仏法部に多く、本朝世俗部に少ない。天竺震旦部では、(26）のように、人や仏に対する命名の由来を述べる場合に使われている例が多い。

(26) 一人ノ男子ヲ令生メタリ。其ノ児、身体金色ニシテ端正ナル事、世ニ比ヒ無シ。身ニ光明有テ城ノ内ヲ照ス、皆金色ト成レリ。父母、此レヲ見テ歓喜スル事無限シ。此レニ依テ其ノ児ノ名ヲバ金色ト名付タリ。（巻 2-17）

一方、本朝仏法部前半では、(27）のように天皇など権力者が、功績のあった人に名を与えることを表す例が目立つ。

（27）天皇首ヲ低テ、五筆和尚ト名ヅケテ、菩提子ノ念珠ヲ施シ給フ。（巻 11-9）

そして、本朝仏法部後半から本朝世俗部では、用例数は少ないものの、名付ける主体が権力者ではなく、世の人々である例が見られるようになり、本朝仏法部前半までとは異なる様相を呈している。

（28）身ノ才微妙ク、心賢ク御ケレバ、世ノ人、賢人ノ右ノ大臣トゾ名付タリシ。（巻 27-19）

『日国』によれば、「名付く」には、①「名を付ける。命名する」、②「一般的に呼びならわす」の２つの語義があり、①は奈良時代から②は鎌倉時代からの用例が挙がっている。上の（26）（27）

は①の語義、(28) は②の語義に該当し、旧来の①の語義が本朝仏法部前半までに多く使われ、新しい②の語義が本朝部後半以降になって使われ始めるところが注目される。和文に限って、新しい語義への展開が進んでいると見ることができるだろう。これは、「名」や「呼ぶ」「呼ばふ」の場合と同じである。

## 2.「3123 伝達・報知」の語彙

### 2.1　分析対象の語彙

この分類項目に掲出されている語で『今昔』で 20 件以上あるものは８語あるが、「触れる」「広める」「訴える」は、それぞれ、「2.1560 接近・接触・隔離」または「2.3392 手足の動作」、「2.1524 通過・普及など」、「2.3611 裁判」の分類項目に入る意味で使われている例が大部分であるため、ここでは扱わない。それ以外の５語の部別の粗頻度と調整頻度は、表２の通りである。

**表２　「3123 伝達・報知」の高頻度語（左：粗頻度、右：調整頻度）**

| 部 | 伝ふ | | 告ぐ | | 教ふ | | 教へ | | 遺言 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 天竺震旦部 | 427 | 37.33 | 192 | 16.78 | 107 | 9.35 | 64 | 5.59 | 10 | 0.87 |
| 本朝仏法部 | 486 | 41.08 | 250 | 21.13 | 85 | 7.19 | 27 | 2.28 | 15 | 1.27 |
| 本朝世俗部 | 336 | 34.29 | 78 | 7.96 | 53 | 5.41 | 4 | 0.41 | 0 | 0.00 |
| 計 | 1249 | 37.77 | 520 | 15.72 | 245 | 7.41 | 95 | 2.87 | 25 | 0.76 |

### 2.2「伝ふ」

まず、最も高頻度の「伝ふ」を見よう、この語の語義は『日国』では３種 11 類に細分化してありやや煩雑なため、『角川古語大辞典』（角川書店）の整理に基づいて要点を示すと、①物を受け取らせる、②事柄を言葉で告げ知らせる、③語り継ぐ、④学芸の奥儀などを伝授する、の４つに分けられる。①は物、②③は言葉、④は奥儀が、それぞれ対象になるものであることから、３つの語義に集約されよう。

『今昔』の「伝ふ」約 1250 件のうち 1000 件以上（８割以上）が、（１）のような「語り伝ふ」という複合動詞の形をとり、その多くが説話末の定型句の一部に用いられており、これは２つめの語義である言葉を対象とするものである。この語義はすべての部や巻に広く行きわたっている。

（１）帰去ニケリトナム<u>語リ伝ヘ</u>タルトヤ。(巻 1-1)

また、１つめの語義である物を対象とする（２）のような例も、３つの部いずれにも同程度使われている。

（２）祖、伯父失ニケレバ、其二人ガ財ヲ併テ<u>伝ヘ</u>テ、(巻 26-5)

そして、３つめの語義である奥儀を対象とする（３）のような例は、天竺震旦部と本朝仏法部に使用例を見つけることができる。本朝世俗部には見られないが、全体に低頻度の語義であることから、ここに文体的な偏りがあるか否かの判断は難しい。

（３）震旦ニ玄弉法師ト云フ人有テ、天竺ニ渡テ正教ヲ<u>伝</u>テ本国ニ返来ル（巻 11-4）

「伝ふ」には文体的に顕著な特徴はないと見てよいだろう。

### 2.3「告ぐ」

「告ぐ」を表２で見ると、３つの部いずれにもよく使われるが、天竺震旦部、本朝仏法部に多く、本朝世俗部ではやや少なくなっていることが見て取れる。

(4) 努々、此ノ羊ヲ殺ス事無カレ。此ノ由ヲ告ゲ申サム（巻 9-18）

(5) 和男ノ、其コニ有シ時ニハ不告シテ、此レニテ云コソ悪ケレ」（巻 24-56）

用例を見わたすと、（４）（５）のように、部による偏りもなく自在に用いられている用法（「告ぐ（基本義）」とする）が多い中で、（６）のように、人を相手に取り（傍点部）、「告て」を介して、発話動詞のク語法を取って（点線部）、発話の引用を導く用法（「告ぐ（転義）」とする）は、天竺震旦部と本朝仏法部での頻度が高く、本朝世俗部での頻度が低くなっていることがわかる。

(6) 光時夢ニ、形チ端正ナル小僧出来テ、光時ニ告テ云ク、「･･･」（巻 17-11）

この発話等の引用を発話動詞のク語法で導く用法は、漢文訓読に由来する語法とされているものであり（山田 1935）、この用法に用いられる「告ぐ」の多さが、上記のような部別の頻度の差になって現れたものと考えられる。

以上のことから、「告ぐ」は、文体的特徴を持たない中立の語であることを基本としながら、発話を導く一部の用法（告ぐ（転義））が、漢文訓読的な特徴を有していたと見ることができよう。漢文訓読の語法と共に用いられることが多い場合、その用法が漢文訓読的な特徴を帯びてくるのだと考えられる。

### 2.4「教ふ」「教へ」

表２で「教ふ」を見ると、すべての部でよく用いられる中で、天竺震旦部で最も多く、本朝仏法部がこれに次ぎ、本朝世俗部で最も少なくなっていることもわかる。「教ふ」の用例を見わたしても、特定の用法が一部の部に偏って出現するというような明瞭な傾向は見出せないが、天竺震旦部や本朝仏法部により出やすい用法や、反対に本朝世俗部により出やすい用法というものは指摘できそうである。以下に、教える主体（二重下線）、教える相手（傍点）、教える対象（波線）、教える発話内容（点線）をマークして用例を示す。

(7) 耆婆大臣、閻王ヲ教テ云ク（巻 3-27）

(8) 人来テ我レニ此ノ経ヲ教フ。（巻 7-25）

(9)「此ノ仏ヲ念ジ奉レ」ト教ヘツル人ヲ尋ヌルニ（巻 7-28）

(10) ヤガテ即チ彼ノ女ノ教ヘシ橋ノ許ニ持行テ立テリケレバ、（巻 27-21）

上のうち、（７）（８）（９）のような、相手、対象、発話内容が示される用法（「教ふ（転義）」とする）は、天竺震旦部や本朝仏法部に多いが、本朝世俗部には少ない。一方、(10) のような、主体が示される用法（「教ふ（本義）」とする）は、本朝世俗部に多いが、天竺震旦部や本朝仏法部には少ない。「教ふ」という動作のどこに焦点を当てて述べるのかの表現法の選択傾向に、部によって差が見られるのである。なお、『今昔』の「教ふ」について、漢文訓読に由来する独自の用法がいくつか存在するという指摘があるが（山本 1993）、それらの用法が特定の部に偏る目立った傾向は見出せない。

名詞「教へ」は、表２によると、「教ふ」以上に、天竺震旦部と本朝仏法部への偏在が目立っており、本朝世俗部ではかなり低頻度になっている。「教へ」の用例を見ると、天竺震旦部では（11）のように、教える主体を指す語を格助詞「の」で受けて、「○○の教への如し」「○○の教へに随ふ」「○○の教へに依る」といった形式で、○○に教える主体（神仏、師、母、夢など）が入るものが非常に多い。

（11）大王、后ノ教へニ随テ始テ仏法ヲ信ズ。（巻 3-26）

教える主体を表示する用法は、先に見た動詞「教ふ」の場合は、本朝世俗部によく用いられるものだった。主体に焦点をあてて教える動作を描写する場合、本朝世俗部では動詞で表現し、天竺震旦部や本朝仏法部では名詞で表現するといった、表現選択の文体差があったのではないかと考えられる。

本朝仏法部では、上記のような用法は多いが、（12）の点線部のような教える内容を受けて「教へ」が使われる例も見られるようになっている。

（12）我レ速疾ニ仏ニ可成キ教ヲ知ラム。（巻 11-9）

### 2.5「遺言」

「遺言」は、表２のように、天竺震旦部と本朝仏法部にあり、本朝世俗部には皆無である。多くは（13）のように名詞用法で使われるが、本朝仏法部には（14）のような動詞用法で使われるものも見られる。

（13）深ク父ノ遺言ヲ信ジテ、寧ニ此羅漢ヲ供養シテ晝夜ニ帰依スル事無限シ。（巻 2-29）

（14）此レニ依テ、「三年、坊ノ戸ヲ可開ズ」トハ遺言シケル也ケリ。（巻 20-24）

この語は、古記録など変体漢文には使用例が見られるものであり、漢文訓読的な特徴を持って『今昔』でも使われたものだと見ることができる。

## 3.「3151 書き」の語彙

### 3.1　分析対象の語彙

「3151 書き」の分類項目に属する名詞には「手」「筆」があるが、それぞれ、「1.5603 手足・指など」の分類項目、「1.4530 文具」の分類項目で使われている例が大部分で、「1.3151 書き」の分類項目で使われている例は少ないため、ここでは考察対象にはしない。動詞には、「書く」「しるす」「写す」があり、「書写」もほとんどの例が「する」を下接する用法で用いられているので動詞用法の語と見ることができる。これら４語の部別の粗頻度と調整頻度を整理すると、表３のようになる。

**表３　「3151 書き」の高頻度語（左：粗頻度、右：調整頻度）**

| 部 | 書く | | しるす | | 写す | | 書写 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 天竺震旦部 | 63 | 5.51 | 24 | 2.10 | 14 | 1.22 | 73 | 6.38 |
| 本朝仏法部 | 128 | 10.82 | 18 | 1.52 | 39 | 3.30 | 69 | 5.83 |
| 本朝世俗部 | 133 | 13.57 | 2 | 0.20 | 7 | 0.71 | 0 | 0.00 |
| 計 | 324 | 9.80 | 44 | 1.33 | 60 | 1.81 | 142 | 4.29 |

３語ある和語のうち、「書く」は、最も高頻度で、後半に進むほどよく使われるようになっているのに対して、それより頻度の低い「しるす」「写す」は、後半ではあまり使われず、前半でよく使われていることがわかる。漢語「書写」は、天竺震旦部と本朝仏法部ではとてもよく使われるが、本朝世俗では全く使われなくなっている。以下、これらの語について、個別に分析していく。

### 3.2「書く」

表３で、「書く」は、各部にありながらも本朝世俗部に最も多い。この語は、部による頻度の偏りだけでなく、巻による偏りも目立ち、20 件以上の用例が存在するのが、巻７、巻 10、巻 14、巻 24、巻 28 の５つの巻である。このうち、巻７、巻 14 は、（１）のように、経を書く話題が出てくる説話が多く、巻 10 は、（２）のように、詩や絵画を書くこと、巻 24 は、（３）のように、絵画を書くこと、巻 28 は、（４）のように手紙や文書を書くことが、それぞれ話題になる説話が多い。何かを書く行為の出現の多寡が、巻や部による頻度差になって現れたものと見ることができよう。

（１）珠ニ浄キ所ヲ造リ儲テ、此ノ経ヲ書ク室ト為リ。（巻 7-18）

（２）柿ノ葉ノ赤ク紅葉タルニ詩ヲ書タリケリ。（巻 10-8）

（３）壁ニ絵ナド書テ得サセ給ヘ（巻 24-5）

（４）先ヅ宣ハヌ前ニ、怠リ文ヲ書テ進テム（巻 28-30）

後に見るように、経や絵画を書写したり描写したりする場合は、類義の動詞が使われることがあり、詩を作文する場合は（５）のように「作る」が用いられることがあるが、こうした様々な対象について「書く」という１つの動詞がカバーしているところから見ると、この語は、とても幅広く使うことのできる、文体的な特徴を持たない語であったと考えられる。

（５）「宮ノ鶯暁ニ囀ル」ト云題ヲ以テ詩ヲ作ラセ給ケリ。（巻 24-26）

### 3.3「しるす」

表３で、「しるす」は、天竺震旦部と本朝仏法部に遍在しているので、漢文訓読的な特徴を持っている可能性がある。「しるす」は、「記」と「注」の２つの表記で書かれることが多く、例外はあるものの、概ね次のように使い分けられている。（６）のような、書き留める内容を「を」格に取る場合は「記」、（７）のような、書き留める物を「に」格に取る場合は「注」という使い分けである。

（６）我レ生レテヨリ以来罪有ルヲバ皆不残ズ記シ、生レテヨリ以来タ善ヲ修セシヲバ不記ズ。（巻 9-28）

（７）其ノ札ニ注シテ云ク、「大安寺ノ大修多羅供ノ銭也」ト。（巻 12-5）

そして、天竺震旦部には「記」19 件、「注」５件、本朝仏法部には「記」４件、「注」15 件が用いられており（他に「註」１件）、部によって表記や用法の多寡が逆転している。漢文訓読的な特徴が、「記」が選ばれる用法でより強く、「注」が選ばれる用法でやや弱くなっていると見ることできよう。

２件だけ見られる本朝世俗部の「しるす」は、「記」「註」が用いられているので、「注」が選ばれる用法が和文的な特徴を帯びていると見ることはできない。実は、（８）（９）に見るように「注」が選ばれる用法で表現される内容が和文で用いられる場合には、「書く」という語が選ばれているのである。

（８）寺ノ僧共此レヲ見ルニ、札ニ注セル所如此ク也。（巻 12-15）

（９）今昔、加茂ノ祭ノ日、一条ト東ノ洞院トニ、暁ヨリ札立タリケリ。其ノ札ニ書タル様（巻 31-6）

こうした用法においては、文体的な特徴を持たない「書く」に対して、「しるす」が漢文訓読的な特徴を有して対立していることを示すものだろう。

### 3.4「写す」

表３において、「写す」は、天竺震旦部と本朝仏法部に用例が偏在し、本朝世俗部に見える７件も、巻 24-16 と巻 25- ２の２つの説話に集中しており、限定的にしか用いられていない。「写す」の用例を見わたすと、経や法文を対象とする〈書写〉（10）、形や像を対象とする〈描写〉（11）と、「瓶の水を写すが如し」という慣用句（12）の、３つの語義があることがわかる。

（10）亡ゼル父母ノ為ニ四部ノ大乗経ヲ写シ奉ル。（巻 6-45）

（11）左門ノ府生掃守ノ在上ト云高名ノ絵師有リ、物ノ形ヲ写ス、少モ違フ事無カリケリ、（巻 25-2）

（12）蜜法ヲ授ル事、瓶ノ水ヲ写スガ如シ。（巻 11-12）

これら３つの語義は部による出現状況に差は見られない。（10）（11）は、「書く」で示した（１）（３）と同じ意味であり、この意味を表す際に、「書く」と「写す」の間に文体差があり、「写す」には漢文訓読的な特徴があるのだと考えられる。（12）の慣用句は、物事の奥儀を伝授する場合に用いられるが、「写瓶」という漢語に基づく訓読表現である。

このように「写す」は、３つの語義にわたる全体が漢文訓読的な特徴を持っていると見ることができる。なお、『日本語歴史コーパス』では別の語彙素に区分されている「移す」も、もとは同じ１つの「うつす」という和語である。『今昔』の「移す」はすべての部に偏りなく分布し、文体的な特徴は持っていない。

「うつす」が漢文訓読文に限って派生させた語義が「写す」であるわけだが、それが起こった背景には、ジスク（2009）が明らかにしたように、漢字「写」の字義が、訓を通して結びついた「うつす」の語義に浸透した事情がある。

### 3.5「書写」

表３で「書写」を見ると、天竺震旦部と本朝仏法部に同程度使われているが、本朝世俗部では全く使われていない。「書写」は専ら「書写する」または「書写供養する」といった動詞用法で用いられるが、その対象は、ほとんどすべての例で、（13）のように経典や経文を対象とした〈書写〉の意味で用いられている。

（13）自ラ法花経一部ヲ書写シ奉ル。（巻 12-29）

この語義では、先述した通り、文体的に中立な「書く」((1) の例) も、漢文訓読的特徴を有する「写す」((10) の例) も用いられたが、「写す」と同様の漢文訓読的特徴を備えた「書写」も多く用いられている。この語義において「写す」と「書写」の使い分けは見られず、「写す」と「書写」は、文体的特徴も重なるところが大きい。両者の違いは、本朝世俗部にも少し用いられる「写す」の方が、漢文訓読的特徴が比較的弱い点である。

## Ⅳ. まとめと課題

Ⅲでは、3つの分類項目について、類義語群における文体的特徴を分析してきた。そこで指摘した特徴を表にまとめると、表4のようになる。語数の多い「3102名」は名詞と動詞に分けてまとめた。

**表4　文体的特徴のまとめ**

| 分類項目 | 文体的特徴なし | 和文的特徴 | 漢文訓読的特徴 |
|---|---|---|---|
| 3102名（名詞） | 名（基本義） | | |
| | 聞こえ | 名（転義） | 名聞 |
| | 字（あざな） | 異名 | |
| | | | 姓 |
| | | | 姓名 |
| 3102名（動詞） | 呼ぶ（基本義） | 呼ぶ（転義1）、呼ぶ（転義2） | |
| | 呼ばふ（基本義） | 呼ばふ（転義） | |
| | | | 唱ふ |
| | 名付く（基本義） | 名付く（転義） | |
| 3123伝達・報知 | 伝ふ | | |
| | 告ぐ（基本義） | | 告ぐ（転義） |
| | | | 教ふ（転義） |
| | | 教ふ（基本義） | 教へ |
| | | | 遺言 |
| 3151書き | 書く（作文の意） | 作る | しるす |
| | 書く（書写の意） | | 写す、書写 |

語の文体的特徴は語形として見えるものではなく、意味のように共起関係にある語から探れるものでもないため、把握するのが難しい。『今昔』の場合、部や巻の頻度差からそれを探ることができる場合が多いが、頻度差は話題差に起因する場合もあるので、慎重な分析が必要であった。

本稿では特に多義語を多く含む類義語群を扱ったが、分析の結果、基本義では文体的特徴のない語であっても、転義において文体的特徴を帯びるものが多く見つかった。「名」「呼ぶ」「呼ばふ」「名付く」では、和文において転義が生じ、その転義が和文的特徴を帯びるところが共通していた。「告ぐ」のように、共起することの非常に多い語句が漢文訓読語である場合、その語義が漢文訓読的特徴を持つようになる場合もあった。

表で網掛けをした部分は、ほぼ同義の語どうしに文体的特徴が指摘できるものであり、そこに文体的な対立関係に基づく緊密な語彙体系が形成されている様子を確認することもできた。こうした緊密な語彙体系も、語義を限定した上で形成されている場合が多いこともわかった。

本稿を受けた課題としては、次のようなことが指摘できよう。まず、語の文体的特徴が、語義

の拡張などによって生じる現象について、より広範囲の多義語を対象に、その実態を把握し、詳しい分析を行うことが必要である。また、ほぼ同義の語の間に文体的な対立関係が認められる場合、そこに意味差があるのかどうかの分析が、本稿では十分に行えていない。田中（2022）では、文体的対立関係のある語には意味差を伴う場合が多いことを指摘したが、多義の現象が絡む場合にもそれが認められるかどうか考察が必要である。『今昔』を資料とした語彙の文体的特徴の研究は、開拓の余地が大きい。

## 参考文献

近藤明日子・田中牧郎（2020）「「分類語彙表番号－ UniDic 語彙素番号対応表」の構築」（『国立国語研究所論集』18, pp.77-91）

佐藤武義（1984）『今昔物語集の語彙と語法』（明治書院）

ジスク・マシュー（2009）「和語に対する漢字の影響―「写」字と「うつす」の関係を一例に―」（『漢字教育研究』10、pp. 6 -45）

田中牧郎（1989）「今昔物語集から見た「訓点特有語」の一面―動詞を中心に―」（『文芸研究』120、pp.43-58）

田中牧郎（2003）「語彙層別化資料としての今昔物語集―二字漢語サ変動詞を例として―」（『国語語彙史の研究』22、pp.17-36）

田中牧郎（2014）「『日本語歴史コーパス』の構築」（『日本語学』33-14、pp.56-57）

田中牧郎（2015）「『今昔物語集』に見る文体による語の対立―本朝仏法部と本朝世俗部の語彙比較」（近藤泰弘・田中牧郎・小木曽智信編『コーパスと日本語史研究』pp.119-148）

田中牧郎（2016）「平安時代の「しるし」と「かひ」―コーパスを用いた語誌研究―」（『国語と国文学』93-5、pp.42-58）

田中牧郎（2022）「『今昔物語集』における語彙の文体差―人間・家族を表す名詞語彙を事例に―」（中部日本・日本語学研究会編『中部日本・日本語学研究論集』、pp.329-349）

宮島達夫・鈴木泰・石井久雄・安部清哉（2014）『日本古典対照分類語彙表』（笠間書院）

山田孝雄（1935）『漢文の訓読によりて伝へられたる語法』（宝文館）

山本真吾（1993）「平安時代に於ける動詞「をしふ（教）」の意味用法について―訓点資料の用例に注目して―」（『訓点語と訓点資料』92、pp.17-36）

## コーパス・データベース

国文学研究資料館『日本古典文学大系本文データベース』（現在は公開停止中）

国立国語研究所『分類語彙表増補改訂版データベース』https://clrd.ninjal.ac.jp/goihyo.html

国立国語研究所「『日本語歴史コーパス』統合語彙表（バージョン 2022.03）」https://repository.ninjal.ac.jp/records/3558

国立国語研究所『日本語歴史コーパス』https://clrd.ninjal.ac.jp/chj/